**佐伯孝代さんとの出会いとつながり**

この後、佐伯さんの話をさせていただくんですけど、(笑顔で生き生きと)佐伯さんと出会ったのは、24年前の1999年8月7日です。その日、私は鳥取県の倉吉市で講演したんです。ちょうど40歳でした。若かったし、会場の雰囲気もすばらしくて、会場からのすごいエネルギーを感じながら、身体全身で私自身のことを語っていきました。すると、終わった後に、「こんな話を聞きたかったんです」と、私のところへ来られた方がいました。その時、名刺をお渡したのが佐伯さんでした。

佐伯さんは、教員でもないんです。行政職員でもないんです。看護師をされている方です。そういう立場の方から、私が話した内容を細かくまとめた講演の記録が送られてきました。その講演記録は、手書きで、強く語った箇所は、字が大きくしてあり、枠で囲ってあったり、線が引かれていたり、それまで見たことがない記録でした。

後に、「どうしても読んでほしいんだけれど、時間の無い先生方に、せめて大きな文字にして枠で囲ったところだけでも読んでほしい。興味を持ったら下線を引いたところも読んでほしい。できれば全部の文章を読んでほしい、そんな思いでこういう形の記録にしているんです」と言われました。

そこからなんです。

(画面に、初めて倉吉の仲間と板野中学校に行った時の記念写真の映像が映し出される)

その倉吉市の講演がきっかけになって、３か月後に倉吉市の皆さん25人が、板野中学校の全体学習(板野中学校同和教育研究会)に来られたんです。その時に佐伯さんも板野中学校に来られたんです。

当時、板野中学校の全体学習は、次から次へと生徒たちが挙手をし、思いを語っていきました。中学生の生の声というのは、この前の中学生集会もそうですが、中学生の言葉には、震えるような感動があります。

講演の記録づくりから始まったつながり、そして、この全体学習への参加が、新たなきっかけとなって、ずっとお世話になっています。

今回これもそうなんですけど、板野中学校の実践記録「峠を越えて」からスタートした人権学習の記録は、2006年度から2011年度まで積み上げた北島中学校の実践記録「生きる絆」、2012年度から2016年度まで続いた藍住中学校の実践記録「藍中の絆」と続いていきますが、そのすべての記録づくりのサポートを佐伯さんにしていただいています。そして、今勤務する松茂中学校の実践記録「松中の絆」も、2017年度から７年目になりますが、ずっとお世話になっています。

「T-over人権教育研究所」のホームページに吉成先生が載せているんですけど、鳴門市人権地域フォーラムのチラシです。

(画面にT-over人権教育研究所のホームページで紹介している2004年度からの鳴門市人権地域フォーラムのチラシが映し出される)

一つ一つのチラシをクリックしたら、その年度の鳴門市人権地域フォーラムの記録が見えるようになっています。ここには20年間の記録がまとまっています。20年間です。中学生や高校生や、様々な年代の語りがずっと展開されていくんです。是非読んでみてください。このすべての記録づくりを佐伯さんにしていただいています。パネリストとしても４回目になります。佐伯さんです。時間はそんなにないんですけど、よろしくお願いします。

**≪パネリスト　佐伯孝代≫**

**４年ぶりに参加できた人権地域フォーラムへの思い**

(立ち上がると、コーディネーターに向かって)すみません、５分超過してもいいですか？

（隣の中野さんが、申し訳なさそうに照れ笑いしながら、「すみません、僕がしゃべり過ぎて」そのやり取りに、会場から明るい笑い）鳥取から来させていただきました。

この20回の中の２回目からずっと来させていただいていて、コロナの関係で４年ぶりになりました。それまで、本当にこの鳴門に来ることが、私の夏の当たり前になっていました。座らせてもらってお話させていただきます。

（会場全体を見渡しながら）この鳴門のフォーラム、皆さん方にとっては、今日帰られたら「ああ、あんな話があったな」と思い出して、誰かにお話をされるくらいで終わるのではないのかなと思います。

私の鳴門のフォーラムは、３か月あります。

というのは、今日はここでお話させていただきますが、フロアーの方から語ることもあります。

ここで出会う知り合った皆さんへ、「また会いたかったんだよ」という思いを伝えたいと思いながら、お土産つくりをします。

何をしようかなと考え、材料を探し、つくる。その期間が約１か月です。

それから今日があります。

帰ったら、この徳島に来た間のレポートや、写真シート、このフォーラムの記録など、約２ヶ月かかり、お土産つくりの時間を合わせて３ヶ月になります。

その間に、私は何度も何度もこの鳴門のフォーラムを振り返ったり、ここで出会った皆さんを思い出したりしながら、また来年ここに来て語れる自分をつくりたいと思って、地元で１年頑張れる力をここで作らせていただいています。

このように、この鳴門のフォーラムは、私にとって来るのが当たり前で、とても大事な場所です。ここでたくさんの仲間と出会いました。中学生、高校生ともいっぱい出会いました。

**以前の自分**

**～同和教育と関わり続ける中で、自分の中で変化してきたこと～**

私は、こうして県外に来ることなど、同和教育を始めた頃には想像もできませんでした。鳥取県内でも、中部の中の小さな決まったところしか行くことができませんでした。そして、私は小さい時から「どもり」吃音ですね。吃音があって、話をする時に思うようにできなかったり、それから、一生懸命すれば２重人格だと言われたり、「あんな人を」という表現をされたり、そんな中で暮らしてきて、自分がこの同和教育の関りと出会う中で、「ああ、不細工でもいいんだな。格好悪くてもいいんだな。一生懸命頑張っている自分がここにいるということだけでいいんだな」と、自分で自分を認められる。そういう自分つくりができたのは、やっぱり同和教育のおかげだなと、私自身思っています。

**～記録つくりを始めて～**

そして、いろんな研修に行く時に、皆さんは、会場に来た時にどこの席を選ばれますか。私の指定席は、前から２番目中央です。そこに何があるかというと、そこの席では、前で語ってくださる講師の先生の熱がそのまま伝わります。

悔しさ、悲しさ、怒り、嬉しさ、様々な思いがそのまま伝わってきて、「今のあなたの思いは、私がもらったよ」そう思えて、「今日聞いた思いをここだけで終わらせてはいけない。来たくても来れない仲間にも伝えたい」そういう思いで、講演記録をつくるようになりました。

つくり始めた頃は、「語るこの人のカラーを崩しちゃいけない。私の言葉に勝手に変えちゃいけないと思

って、語られた言葉の100％を拾うようにして、そのままの言葉で伝えるようにしていました。

でも、それを続けてきた中で、ある、全国でいろいろな講演をして回られる先生に、こんなことを言われました。

「佐伯さん、俺はなあ、こういう記録を届けてもらって『見てほしい』と言われる時に、教育委員会から来たものだったら、もっときちんとしたものを送ってこいと突き返すんだけれども、佐伯さんの場合は、そういう立場でないから、でも、『校正』ということをもう少し勉強してほしい。

話したことを文字にするということは、話すその内容が目の前に浮かぶくらいにしなくてはいけない。「〇」「、」にももう少し神経を使ってほしい。それだけで意味が変わってしまうんだ。」

そう言って、赤ペン添削を３回してくださり、最後に封書でお送りした講演記録について、「すごいな。すごく変わった」と認めてくださった。

そこまで一生懸命に関わってくださった、そういう人のおかげで、この講演記録をつくることが自分の中でも少しずつ進化してきたなと思います。

人は、伝えたいと思う時に、いろいろな研修会でのいろんな言葉を聞いた時に、知らないことがたくさんあります。私は正しいことをすこしでもわかりやすく伝えたいと思って、49歳でパソコンを独学で覚えて、ネットでいろんな意味を調べながら記録を作るようになりました。

そのことで、一番得をしたのは自分自身です。いろんな人の思いに触れて、自分がそれまでいっぱい身体に殻をまとってきた中で、１枚１枚その殻を外してくることができた。素の自分で生きられるようになってきた。それはやっぱり同和教育のおかげです。出会ってきた皆さんのいろんな思いが直に伝わって、それを、聞いたものをその人に返し続けてきた。そのつながりを作ってきたおかげだと思っています。

**同和教育の学びの中から見つけた生きるよろこびを、他の人にも伝えたい**

同和教育と関わり始めて10年くらい経った1998年、私の中に一つの疑問がいつもありました。

「どうして、研修会での発表は被差別体験をして、それを乗り越え今がある。そんな発表ばかりなんだろう。もっと部落外で、学ぶ中でこんな思いになった。まだよくはわからないけど、こんなことに気づいた。そんな発表がもっとあってもいいんじゃないか」

そんな疑問です。

そんな頃に、同和教育の仲間から、「部落外にいて頑張っているあなたの思いを伝えてほしい」と依頼を受け、市の主催の解放文化祭と、県主催の県集会の特別報告として私の体験を話しをさせて頂きました。

この時に、職場の上司も聞きに来てくれたことで、それまで、同和教育の関りの場ではいろいろな思いを語れても、身近なところで頑張っていることを語ることに躊躇していた自分が、「これだけの人の前で宣言したんだ」という何か吹っ切れたものがあって、それからの活動の幅が広がりました。

そして思いました。

今、研修することで、知識は徐々に広がってきた。けれど、それが行動につながらない。これは、行動する訓練が少ないからではないかと。

その頃出会った参加型学習に「これだ」と思い、自分でプログラムを組み、校内の保護者に向けたり、小学生、他地域の保護者、先生方などに向けたワークショップの研修のファシリテーターとしていろいろな場に行かせていただきました。

それによって、確かな知識と、言葉や行動する力つくりを進めてきました。そんな仲間の広がりや、たくさんの出会いは私に同和教育のよろこびを教えてくれました。

今日のチラシにも、「同和教育幸せ配達人」ということを書かせていただきました。

これは、30年近くなりますけれど、やはり続けてきた中で、その同和教育の学びというのは、自分がこれまで周りに囚われ、周りに合わせ、自分を抑え、本当に窮屈に生きてきた中からの自分の解放だなと思って、やっぱり、自分がそれだけ楽に生きられるようになって、幸せを感じるようになった。

これは自分だけに留めて置くのはもったいないから、１人でも、２人でも、その仲間を広げたいと思って、こういう宣言をしながら全国でも、いろんな場所で声を出し続けています。

**遠くで語れても、地元で動けなくて何になるんだろう**

このフォーラムの中で、そして、先方も紹介の中にありましたが、「中学生の授業記録」を作らせていただく中で、中学生の本気と出会いました。一生懸命自分を語ろうとする努力、熱、言葉にできないけれど何とか伝えようとする思い。そういう思いをいっぱい受け止める時に、自分は中学生に負けているなと思いました。

いくら遠くで偉そうなことを言っても、地元で動けなくて何になるんだろうと思いました。そんな時に出会った職場での仲間外しに、職場の中でこういうことがあったと言葉にできたのは、やはりこういうところで皆さんからいただく力であり、思いであり、笑顔であり、言葉であり、そういうもので職場の中に一石を投じて、仲間外しのある職場ではいけないと、院長から全職員に通達があったり、朝のミーティングで、1か月間各部署で所属長が職員に通達を続けるという、そういう状況も作っていただきました。

そして、その中でもその空気がずっと続くわけではなくて、職場の中で、またきつい時もありました。そういう時に、中学生さんが、「くちびるに歌を」という映画を観て授業をされて、「15年後の私へ」という作文をかいて発表したりされます。私は、その職場できつかった時に、中学生さんの真似をして「２年後の私へ」という作文を書いて、その所属長に読んでもらいました。こんな文章です。

**2年後の私へ**

**鳥取県倉吉市　　佐伯 孝代**

**2年後の私は、どんな生活をしていますか？　看護師続けていますか？　楽しく仕事できていますか？今の私は、毎日の仕事で少しいじけています。私の今いる職場は、急性期の部署ではなく、療養病棟で、ある程度安定した患者さんが多いのですが、平均年齢85歳くらいかな。超高齢でいつどう変わるかわからない面もあります。体力もいります。**

**そして、大変なのは、やっぱり職場内の人間関係です。看護師は、40代から60代まで様々ですが、一緒に働く介護福祉士は40代で看護師のほぼ同数で働いていますが、ほとんど職場内での勤務移動もなく14～16年同じ部署にいて、独特の空気が漂っています。**

**仲のいいグループ内では、楽しそうににぎやかですが、一本線を引いたメンバーには、いろいろな場面で、小さなことでも大きくされて、指摘されることが多く、そのグループに近づこうとしても、距離を置かれてしまいます。**

**気分転換の方法を自分なりに作り、最小限のかかわりにとどめ、自分の仕事をこなしていけばいいと半ば割り切りながらの仕事中です。古くからこの部署にいる看護師も、結構言いたい放題で、その日のメンバーによっては、気の重い時もありますが、救われているのは、看護師の中に、安心して愚痴をこぼせる人がいることです。そして、介護福祉士の中でも、男性陣や、新しく入ってきた人が、温かく助けてくれるからです。**

**最近の私は、少し気持ちが落ち込んでいましたが、これまでの48年を振り返って思います。私は、高校3年の時に、「自分は、トップに立って人を引っ張っていく力は弱いけれど、誰かの助けになっていくような仕事は向いていると思う。」そう心を決めて、看護師の道を選んだんですよね。**

**私は、家族や患者さんと心の近い看護師でありたい。患者さんや、家族さんが相談しやすい、出会ってよかったと思ってもらえる看護師でありたいと、それを自分の中の芯として仕事をしてきたのに、今の私は、周りに対し、気のし過ぎを実感します。**

**66歳の今の私は、やっぱり筋力低下や、体力的にも以前のようにはいかなくても、今の私だから見えること、気づくこと、あるはずですよね。サプリを使ったり、痛み止め使ったり、自分なりに工夫して頑張っているなあと思っていますよね。**

**自分がこの仕事が好きで、家族さんたちから、出会えてよかったと言ってもらえたり、貴方は看護師になるために生まれてきたような人だと言ってもらえたり、悔しいこともいっぱいあったけれど、うれしいこともいっぱいあったこと、忘れないようにね。**

**この病院での48年間の中で、看護師として、目覚め、鍛えられ、育てられ、18歳からこの病院と共に過ごしてきて、いろんなことを頑張ってきたこと、いっぱいあるんだから、2年後の私は、今よりも心が元気になっていますか？**

**よく頑張ったなあと、自分をほめながら仕事を終えられますか？最後の日にきっと自分をほめてやることできていますよね。たくさんの人に励まされながら、自分で決めて自分で歩いてきたこの道だもの。**

**学びを自分への振り返りとしながら今の自分がある**

こういう文章を作って、中学生さんの真似をしてみました。学びを、いつもこういうふうに自分を振り返らせてもらいます。人に言っていることを本当にやっているんだろうかな。頑張っているんだろうかな。その振り返りの中に今があります。

人間関係がきつく、「２年後の私へ」を書いて数か月後、職場の職員数の関係で、急な勤務交代があり、変わった部署の人間関係の温かさと、そこの仲間たちからの言葉と態度による感謝とねぎらいの言葉を毎日のようにもらうことで、認めてもらえることと、自分の居場所があり、安心があることのありがたさを感じることができ、「自分にできることは頑張ろう」そんな心の栄養をたくさんいただくことができました。

これからも、いろんな出会いを大事にしながら、いろんな人のいろんなことを学び続けながら、自分の進化は死ぬまで発展途上にあると思っています。

そういうつながりを持たせていただいている、ここにお集まりの皆さんともまた、いくつかの新たなつながりができたら有り難いかなと思います。ありがとうございました。（拍手）

**≪コーディネーター　森口健司≫**

ありがとうございました。「くちびるに歌を」という映画の話をしてくれましたが、アンジェラ・アキの「手紙」という楽曲がテーマとなった映画があります。ご存じの方があると思います。

この映画は、長崎県の五島列島の中学校が舞台となった映画なんです。全国中学校合唱コンクールの課題曲が、アンジェラ・アキの「手紙」で、五島列島の中学校の合唱部を指導することとなった主人公の先生が、合唱部の生徒たちにに「15年後の自分へ」という手紙を書くように指導します。その時に、１人の男子生徒が、その先生に対して、自分自身をさらけ出した手紙を書いてきます。それは、その生徒がずっと心の底に秘めてきた自閉症のお兄ちゃんのことでした。

この手紙は、松茂中学校の子どもたちの心に染み込んでいきます。その手紙の全文を改めて紹介します。

**拝啓15年後の自分へ**

**15年後の僕は兄のそばにいますか？**

**いや絶対いるでしょうね**

**僕は兄に人一倍感謝しています**
**だって兄が自閉症じゃなかったら**
**僕は生まれてこなかったのですから…**
**僕は分かっています**
**将来、兄だけが取り残された時…**
**一人では生きていけないから**
**両親は決意したんだと思います**
**自分たちが死んだ後に**
**兄を世話してくれる弟や妹をつくろうと…**
**そして僕がこの世に生まれたのです**
**もし兄が普通の子だったら**
**僕はこの世にいなかったでしょう**
**僕は将来に対する不安がありません**
**自分の存在している理由がはっきりしているから**
**だけどたまに　ほんのたまに…**
**兄がいなければ**
**そう思うことがあります**
**兄を疎ましく**
**思うことがあります**
**でもきっと僕は**
**これからもずっと…**
**兄のそばに寄り添うでしょう**
**それが僕の生まれてきた意味なのですから**

松茂中学校の生徒は、学年120名ぐらいいます。人数から考えても、同じような状況の生徒はいます。

今年も、その授業の中で、お姉ちゃんが自閉症であるということを綴り、この映画「くちびるに歌を」に学ぶ語り合いの人権学習において、家族への思いと自閉症という障がいを持つお姉ちゃんのことを語った生徒がいます。

これまで絶対に言わなかったこと、自分の中で押し殺してきたことを語った瞬間、その生徒の姿は変わっていきます。語った瞬間、生きることの意味が、しっかり自分の中に広がっていきます。人として生きる誇りが芽ばえていきます。

その語り合いの人権学習のことを夏休みの三者面談で、お母さんに伝えるんですが、１年前の三者面談で、初めてお姉さんのことを語ってくれたお母さんの表情と、また違った表情がお母さんの中に広がっていきます。本心をさらけ出す人権学習は、私たちの中に、生きるよろこびを育んでいきます。

人権学習のよろこびは、出会いとつながりです。それは、「ひとごと」ではなく「わがこと」として、自らの思いをいきいきと表現できる関係性の中で培われていきます。